
世界で一番嫌いな彼氏 1

如月綺華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番嫌いな彼氏

1

【Nコード】

N4601A

【作者名】

如月綺華

【あらすじ】

リストラにあい、某大型企業社員から一気に無職へと人生真つさがさまな冬華。そんな冬華が最悪な日に出逢ったのは、痴漢撃退してくれた大人っぽい雰囲気の人だったのだが、その正体は……。ややギャグな純愛(?)。

第一話 最悪な日

あたしがこの世で最も嫌いなもの
りでも、ましてや鼠でもない。

それは、蜘蛛でも、ゴキブ

それは、あたしの現彼氏、魅月晴。

そんなあたしと、大っ嫌いなアイツとなぜあたしが付き合わなくち
やならなくなったのか……。

それは、あの暑い夏の初めの出来事から始まった。

* * *

はあ、間に合った。
あたしが、安心して胸を撫で下ろしたのと同時に背後でぶしゅうと
いう音がした。そして、電車の重いドアがホームからその空間を切
り離す。

完全にドアが閉まってほとんど間もなく、電車がせわしなく動きだした。

はあ、なんとか間に合ったはいいものの、この寿司詰め状態。勘弁してよ。こつちとら朝からこんな糞暑い中走って来たつてのに……。

あたし、江藤冬華は最近就職口をなくした、所謂リストラの被害者の一人つてやつ。

それが、今日新たな仕事の面接だつてのに、こんな日に限つて、寝坊……。

身だしなみをチェックする時間なんてなく、ギリギリセーフでこの電車に駆け込み電車。

ま、この分だつたら、ちゃんと整えたところでもみくちやにされてただろうから、大した違いはないだろうけど。

…それにしても、さっきからなんか、目の前にいるサラリーマン風の男の体が、必要以上に胸に押しつけられてる気がしてたまらないんだけど　　混んでるし、やっぱ気のせいかな。

だけど、これが大間違い。

この変態リーマン、こつちが黙ってるのをいいことに、手をあたし

の後ろに回してお尻を触ってきやがった。
これは、間違いなく……痴漢。

ちくしょー、普段こんな混んでる電車なんか乗らないからなあ。前の会社じゃ、出勤はバスだったし。こんなことなら、こないだ買った雑誌の痴漢撃退法のページよく読んでおくんだった……。

そんなことを考えていると、あたしが恐くて動けなくなっていると思っ
て付け上がったのか、その手はだんだん下に下がってく
。

冗談じゃない。本気でピンチだ。

肘鉄を食らわしてやろうにも、身動きができない。

そのときだった。

「痛っ」

突然、あたしのお尻から手が離れていった。

な、何？！何が起こったの？

あたしは、その痴漢男の方に視線を向けると、奴の顔はひどく何か

に耐えているかのように歪んでいる。

ふと足元を見た。それでやっと合点がいった。痴漢男のその黒い革靴の上から思いつきり、まだ新しそうなスニーカーが踏み付けていたのだ。

そのスニーカーからどんどん上に視線を辿らせて見ると、隣にいたぱつと見大人っぽい雰囲気を漂わせた男性と目が合った。すると、その瞬間、彼は外見とは似つかない、人懐っこそうな笑みを浮かべこちらにむかつてにこつと微笑んだ。

あたしは、この時、この笑顔にくらつときた。

そう、この時、は。

電車到着のブザーが鳴り、ドアが開くと同時に人がまるで栓を抜いた湯槽のお湯のように次々と電車の外へと押し流されていく。

あたしは、その人込みの中からさっきの人を捜し出そうと必死で目を懲らした。だが、どれだけ見渡しても人だらけのホームでたその内の一人を見付け出すことはできなかった。

あんなかつこいい人に助けてもらえるなんて。
今日は朝から最悪だったけど、さっきの笑顔だけでなぜかそんな嫌な気分が吹っ飛んだ。

お礼言えなかったなあ。

まあ、あつちはあたしのことなんか覚えてないだろうから、いつか。
あたしはふと腕に巻きつく皮製のベルトにつく、1から12までの
数字を刻む平盤を見た。

「やばっ」

時計はもう九時を指していた。面接の時間まで、あと半時もない。
せっかく朝から走ってきた意味がなくなつては困ると、急いで駅か
ら賑わいだした街へと踏み出していった。

うゝ。

なあにが、「君、定職に向かないんじゃない？」だよ。自分の意見を精一杯アピールした結果が、これだ。

まあ、確かに、面接官の間違いを指摘したのが悪かったけど。

「きつと上司とうまくやってけないでしょ？」

・・・そんなこと無かったけど。いや、そんなことあったから、会社のリストラリストに載たんだっけ。結局うまくやれてると思って

たのはあたしだけだったかも。

そんなこんなで、今日の面接、きっと落選決定。通知が来る必要も無く、馬鹿でもわかる。

はあ、朝から痴漢に遭うわ、面接は最悪だわ、やっぱり今日はツイてない。友達の皐月から飲もうメールきてたけど、ついてない日は、家にじっとしてるのが一番。皐月には悪いけど、断りのメールを電車の中で打つ。

しかし、ケータイをポケットにしまったとたん急激な眠気に襲われた。

まだまだ、降りる駅まであるし、少しくらいいつか。

そう思ったあたし、瞼の重みには逆らわず、ゆっくりと穏やかな眠りへと落ちていった。

第二話 見つけられた小さな”冬”

誰かさんが誰かさんが

誰かさんが見つけた

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

ねえ、小さい冬を見つけてくれるのは誰ですか？

はっ。

目を覚ました時にはもう遅かった。

『次は終点、次は終点』

嘘っ。あたしが降りるはずの駅は確か、終点よりも乗った駅からの方が近かったはずだ。

またやった。

ほんとに今日は最悪な一日。家にすら帰れない。

とりあえず、終点で電車から降りる。夏の夜の涼しい風が肌を撫でる。

ふと顔を上げてみた。

あたしは、思わず絶句。駅の周りは真っ暗。かろうじて、出口から続く細い道を微かな外灯が照らしているだけだ。

あたし、どこまで来たの？さっきまで、外はまだ明るかったはず…。

退屈そうに乗車客の切符を集めている駅員に近寄ったあたしは、手に持った切符は渡さず、思い切って尋ねてみた。

「あの、次の電車って……」

それを聞いた駅員は面倒くさそうに、口を開いた。

「次？次は、明日になるまでありませんが」

ありえない。

やっぱ、今日は最悪。

これからどうしよう。こんな田舎じゃ、ビジネスホテルなんかありそうにないし。

あたしはとりあえず、駅のホームから出た。だって、明日まで使われないのに居たってしょうがないもの。

どうしようか迷っていると、一台の車が駅の前に立ちすくむあたしの眼前を走っていった。

へえ、こんな細いところ車通れるんだ。

なぜか感心してしまったあたしの目の前で、その車はブレーキを踏んで停車した。

どんな人が乗っているか少し気になったあたしは、横目にその車のドアが開き中から人が出てくるのを盗み見た。

「あつ」

そこから出てきたのは、朝の電車で痴漢を撃退してくれた、あの人だった。

「ん？なに人見て変な声だしてんの？……江藤冬華さん」

それを聞いた瞬間、あたしは目から目ん玉が落ちるかと思うくらい驚いた。

「な、なんで」

驚きすぎて、それ以上言葉が続けられない。だけど、その後続く言葉を察したのか、彼が言う。

「だって、待ってたんだもん。……最初あなたの降りる駅で待ってたのに、降りてこないから。ホントは、俺が駅から出てくる冬華さんをつこよくお出迎え～なはずだったのに」

顔の印象とはまったく異なる軽い話方をするこの男を記憶を引っ張り出して脳内検索にかけたが、一つも該当するものとして弾き出されたものはなかった。

もしかして、これが世に言う、ストーカーさん？

「あたし、あなたみたいな人知りませんっ」

思いつきつて、冷たく言ったあたしに、彼の見せた反応は意外でしかなかった。

「知るわけ無いじゃん。初対面だもん、今日の朝で」

はあ？

思わず口が開けっ放しになったまま、彼を見つめた。

「まさか、ターゲットが朝助けた美人さんだったなんてね。俺だつて思いもなかったし」

まったく話が読めないんですが……。

「え？だって、あの大企業に勤めてるんでしょ？ 皐月姉からそう聞いたんだけど」

さあ〜っ〜き〜？

親友の名前が出た瞬間、あたしは皐月に殺意さえ覚えた。この、面倒くさいのを押し付けた張本人で訳だ。

きっと、今日飲みに行ってたら、こいつが乱入して来たらに違いない。

「キャリアウーマンで、こんな美人なら言うことなしだし……決めたと」

一人でぶつぶつぶやいていた男は、突然顔を上げると、子供のように輝かした笑顔をあたしに向けると、こう言ったのよ。

「冬華さん、今から俺の彼女ね」

小さい”冬”が見つかったのは、他でもない、この魅月晴と言うと
てつもなく変な奴だった。

第三話 何でこうなるの？

「ちょっと、皐月い〜どおいうこと？」

朝一番にかけた文句の電話の向こうに、思いっきり心のうちを吐き出した。

「ええ〜？だって、あんたいつまでたっても彼氏作らないじゃないの。……まあ、あいつのこと忘れられないのは分かるけどさ」

あいつ……。あたしの元彼のこと言ってるのは分かってる。別に忘れなくたっていいじゃない。だが、まわりはともそうは思ってくれないらしい。

「でも、晴はなかなかいい奴だからさ。変だけど。あ、あいつには冬華が会社辞めたこと言ってないから。じゃ」

がちや。つーつー。

一方的に切られた。

仕方なく、耳から受話器をはずしたとき、台所から声がした。

「朝ってご飯派？それともパン？」

こちらに半分身体を乗り出して居たのは、他でもない、魅月晴。

「ていうか、君、いつまでここに居るの？」

あたしの口からはため息。

「いいじゃん。送ってきてあげたんだし」

そりゃあそうだけど。

「っていうか、冬華さんってほんと往生際悪いよね」

こいつが言ってるのは、昨日の出来事のこと。

*
*
*

「絶つつ対、い・や」

「いいじゃん、減るもんじゃないし」

「いいや、減る。あたしの平和な日常が」

「せつかく送ってってあげるって言うてるのに。家教えてくれなき

や、送ってけないじゃん。それに、彼女の家を知ってるのは当然だ
と思うんだけど。後、合鍵も」

あたしはそんなことしたら終わりだと思った。

「あたしはあなたの彼女じゃありませんし……あたしの家をあなた
に何か教えたら、何されるかわかんないでしょ」

「何って？毎日通うただけだけど」

それが一番恐ろしいんだって。

「じゃあ、どこ行くの？俺んち？」

「誰が行くかつー！」

あたしがほぼ怒鳴るように言ったら、晴は、少し悲しそうに俯いた。
なんだか、あたしが悪いことしたみたい。

「う、と、とにかく、あなただけでも、家、帰ってください。あた
しは自分で何とかする。明日、会社とかあるんじゃない？」

「あー、まあ、一日くらいいいじゃん。まだ入社一年目だし。職場
の人たち、俺に甘いし」

ちょっと待って。入社一年目って、こいつあたしより……年下？！

「君、いくつ？」

「21だけど？」

うつわ、あたしより4つも年下……。この、ふけ顔め。てつきり年上だと思ってたのに。

「じゃあ、冬華さんが決めないんなら、俺が決める。早く、車に乗って。ほら、早く」

「ちょっと、押さないでよ。もう」

あたしを強い力で車に無理やりと言っていていい感じで押し込む。はたから見たら、誘拐現場。幸か不幸か近くには誰も居なかったが。

あたしを助手席に荷物のように詰め込み終わると、彼は、車の前をまわって、運転席のドアを開けた。

「どこいくの？」

隣のエンジンをかける男におそろおそろ尋ねた。

「楽しいところ」

は？

バカみたいに口を開けたままのあたしに、彼は初めて会ったときと同じ、あのさわやか笑顔に向けた。

「それと、俺、”あなた”でも”君”でもないから。魅月晴。み・つ・き・は・る。分かった？」

だが、そのときの笑顔は初めみたようには素敵に思えず、寧ろ悪魔

の笑みに見えたのだった。

「くう」

「きく」

「やっぱ、夏のビールはいいねえ。これで、花火がパーンて上がれば最高なんだけどなあ」

「冬華さん、なかなか風流なこというね。おっちゃん、もう一杯追加あ」

そう、ここは、どこにでもある居酒屋。

「まだ、飲むんですか？お二人さん」

カウンターの向こうから、怖そうな顔の居酒屋の店主が似合わないにこやかな笑みで話しかけてきた。

「まだまだ行くよ。朝まで飲み明かすもんねえ、ね、冬華さん」

「もっちろんっ」

気前よく返事するあたし。

今思えば、ただのバカ。やめとけばよかったと後から思っても、もう遅い。

騒ぎまくって、晴相手にたくさん愚痴ったのは、恥ずかしながら覚えてる。

それからしだいにはつきりしなくなる記憶のとぎれとぎれに、あいつのと、居酒屋のおじさんの顔とが浮かんでは消えていく。

次に、頭がしつかりしたときには自分の家のベットの上だった。

少しでも首を横に動かして、一瞬見覚えのないものが視界に飛び込んできた。目が冴えてきたとたん、それが、人の顔だとわかる。

そして、あたしの本日第一声は、外を散歩してた猫が塀のうえから

おっこちるくらいの悲鳴。

で、今に至るわけで。

「ほんとにさあ、酔っ払ってる癖に、なかなか自分ち言わないんだから。『あたしの日々がストーカー対策で埋まっちゃう』だの叫んでさあ。どうせ教えるんならあんな喚いてる前にさっさと教えられるのに」

あたしに引つ搔かれた傷に少し痛そうに触れながらすねた子供みないな表情。

また、あたしは悪くないのにちよつと罪悪感が胸を過る。

「つて、あんた、これが狙いだっただしょっつ」

あたしはこいつのあくどいやり方を思い出して罪悪感を振り払い、水を得た魚のように反撃した。

「しかも、この状況、めちやくちや事後」

はあ、と今日、何回目かわからない深いため息をついた。

逢ったばかりの男とその日になんて。
ほんとに取り返しがつかない。そう思い出すと思わず視界が滲んだ。
そんなあたしを知ってか知らずか黙って明後日の方を向いたままゆ
っくりタバコをふかす。
そんなこいつにだんだん腹が立ってきた。
大体、こいつの所為じゃない。

「もう、いい加減早く帰ってっっ」

その声に飛び上がる晴。

「何、急に」

「いいから帰ってってば！！！」

涙声にで叫びながら晴の背中を玄関のほうへ押す。

「もう二度とこないでよつ。今度あたしの前に現れたら……」

その台詞とともに奴の鼻の先でドアを思いっきり閉めた。

ちよつとやりすぎたかな。いや、と一人になった部屋であたしは首
を振った。あいつが悪いのに、何で同情してるんだろ。
今日は気分転換にカラオケでも行くかな。

あたしは、携帯電話を開いて、ダイヤルを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4601a/>

世界で一番嫌いな彼氏 1

2010年10月11日18時48分発行